

Edgar Allan Poe の “Eleonora” における空間

岡 本 晃 幸

Synopsis: The setting of enclosed space recurs in many works of Edgar Allan Poe and some critics regard it a motif of his works. Although the locale of “Eleonora,” (1841) is “the Valley of Many-Colored Grass,” this valley is also circumscribed by mountains, – thus is, – a variation of the enclosed space. This paper focuses on this outdoor yet enclosed space. The analysis will reveal the unique treatment of space. Space in “Eleonora” is organized according to the narrator’s relationship with others. Thus, after the death of Eleonora, who is the only object of interest to the narrator, the description of the city where he finds himself lacks materiality. Even in the ending, which is interpreted as salvation by some critics, the narrator is trapped in an enclosed space which reflects his being restricted to a relationship with Eleonora.

序

Edgar Allan Poe の作品において、「閉ざされた空間」という設定は形を変えてしばしば登場する。たとえば “The Premature Burial” の「棺桶」や “The Pit and the Pendulum” における「拷問部屋」などがその典型である。海を舞台にした *The Narrative of Arthur Gordon Pym of Nantucket* においても、主人公 Pym は「船倉」などに幾度も閉じ込められる。このような「閉ざされた空間」、あるいは Poe の作品における空間設定は批評史においても度々注目されてきた。たとえば Richard Wilbur は “The most important of these recurrent motifs is that of *enclosure* or *circumscription*” と述べ (Wilbur 811), これらは “the exclusion from consciousness of the so-called real world, the world of time and reason and physical fact” を意味するとしている (Wilbur 812)。一方, Robert L. Carringer は *The Narrative of Arthur Gordon Pym of Nantucket* を分析して, Poe

の作品における「閉ざされた空間」が “[Poe’s] fictional universe of negative possibility and the severely restricted prospects and interests of his protagonists” であることを示唆し, “his centers of space are physically threatening to his protagonists because the internal condition that they symbolize is also threatening to the protagonist’s rational and moral nature” と述べている (Carringer 510)。両者とも「閉ざされた空間」が Poe の作品において単なる舞台設定ではない重要な要素であり, そしてそれが現実の世界ではなく, 登場人物の精神のメタファーとして読んでいる点で一致している。

本論で取り上げる “Eleonora” は山奥の谷間と都市を舞台にしており, そこは確かに「棺桶」や「拷問部屋」よりはるかに開かれた空間である。ただ考慮しておきたいことは, この作品は Poe の作品群の中で, 「美女再生譚」と呼ばれるサブ・ジャンルに区分されることである。「美女再生譚」とは, その名前が示すように死んだ美女が何らかの超自然現象的な方法でよみがえってくるという, 共通するプロットを持つ物語で, “Morella”, “Liegia”, “Berenice” などがそれにあたる。今言及した美女再生譚の物語が屋内で展開するのに対して, “Eleonora” は屋外を舞台としている。つまり, 他の美女再生譚とは異なり “Eleonora” の空間設定には明らかな相違が見られる。この違いは見た目ほど単純ではない。というのは, 後述するように語り手, Eleonora, そして彼女の母親が住む “the Valley of the Many-Colored Grass” は周りを切り立った山に囲まれており, 外界から隔絶されているからだ。屋内から屋外へ「閉ざされた空間」から「開かれた空間」へと変化しているかのように見えるにもかかわらず, それでもなお本作品の舞台が周りから切り離された「閉ざされた空間」を形成しているといういささか逆説的な状況を確認することができるのである。Wilbur や Carringer が指摘しているように Poe の作品において空間が重要な役割を果たしているのならば, この奇妙な空間は何を意味しているのだろうか。

以上の点を踏まえ, 本論では “Eleonora” における空間の問題について考察するが, 作品中の空間を考える際に, Otto Friedrich Bollnow の「数

学的空間」と「体験されている空間」の区別を参考にしたい。彼によると、「数学的空間」とは「それ自身においては内的文節にわけられておらず、完全に均質であり、またこのようにしてすべての方向に向かって無限に広がっている」空間であるので、この空間は、そこに存在する人物の心理的な影響を一切考慮しない、「等質性」を特徴としている（Bollnow 16）。これは谷が山脈などによって外部から隔てられているといった地理的な事実のみからとらえられた空間を指し示す。一方、「体験されている空間」とは「人間の具体的生活に対して開きしめられているままの空間」を指す（Bollnow 17）。Bollnow はこの空間に関して八つの特徴を挙げているが（Bollnow 16-17）、それをまとめると、人間が具体的に経験し、その経験する人間との係わりにおいて意味を持ち、どの場所もその人間にとって特別な意味を持っているような空間を指すということになる。「数学的空間」が「等質」であるのに対し、「体験されている空間」は、体験者の意識や記憶など様々な要素が反映され様々に分節される空間である。この二つの空間の区別に依拠しつつ、作品内の空間の分析を進めていく。

1 「体験されている空間」としての谷

まず作品中における空間に関する記述の箇所を見ていきたい。物語は一人称の語り手の視点から語られ、最初に“*I am come of a race noted for vigor of fancy and ardor of passion*¹”（638）から始まる、導入となる語りがあり、その後には回想となる谷の描写に入っていく。谷の描写の中には、語り手自身の空間に関する感覚をうかがわせるものが幾度も現れる。たとえば、以下は語り手たちが暮らす谷について述べられた箇所である。

No unguided footstep ever came upon that vale; for it lay far away up among a range of giant hills that hung beetling around about it, shutting out the sunlight from its sweetest recesses. No path was trodden in its vicinity; and, to reach our happy home, there was

need of putting back, with force, the foliage of many thousands of forest trees, and of crushing to death the glories of many millions of fragrant flowers. Thus it was that we lived all alone, knowing nothing of the world without the valley, I, – and my cousin, and her mother. (639)

周りを “giant hills” に囲まれているということには、物理的な意味で谷が外部から閉ざされていることが示唆されているが、ここで強調されているのは単なる地理的な事実だけではない。“the world without the valley” という表現から、語り手にとって世界は谷の内と外に分節されていることがうかがえる。また語り手は、太陽の光さえ締め出すこの谷へは何人たりとも踏み込めないことを強調している。さらに侵入者は “the glories of many millions of fragrant flowers” を踏みつぶさなければ谷に立ち入ることができないとも述べられている。その際に “death” という語が用いられていることにも注意しておきたい。言うまでもなく死とは、アダムとイブが神の言いつけを守らず禁断の実を食べ、楽園から追われた際に与えられたものである。楽園に咲くと言われる “asphodel” (640) が花開いていることから、この谷には楽園のイメージが付与されているだけでなく、外部からの侵入という行為による楽園喪失も暗示されていると読むことができるであろう。谷が山によって囲まれているという「数学的空間」を構成する地理的条件は、「体験されている空間」という視点から見た場合、神話的な厚みを帯びてくる。

この神話的意味を持った谷は、語り手と Eleonora の関係とも関連している。二人が初めて愛を感じお互いを抱きしめあう場所が “the serpent-like tree” (640) の下であることから、この場面が原罪の瞬間であると解釈することは難しくない。愛と原罪の結びつきに関しても、Jules Zanger はキリスト教の伝統におけるセクシュアリティと原罪の関連性を指摘して、Poe の複数の作品において “alternative narrative realizations both of one another and of the principle of forbidden female sexuality originally em-

bodied in the Garden myth” (Zanger 536) が提示されていると述べている。二人が感じる愛とは、本作品における知恵の實の比喩なのだ。実際、Eleonora はこの後 “the last sad change which must befall Humanity” (641)、すなわち原罪の結果として死を迎えることになるのだが、語り手は Eleonora への感情を “Love entered within our hearts” (640) と表現している。“Love” は内部から湧き上がってくる感情ではなく、外部からの訪れるものとして認識されているのだ。語り手達の心に入り込む “Love” は、谷に死とともに訪れるはずの侵入者のイメージと重なってくる。語り手を取り囲む物理的な空間的条件は、彼の心理そのものを表す比喩的な役割さえ帯びてくる。

さらに、この谷の空間を一層複雑にしているのは、この物語が回想の形式をとっているという点である。そもそも語り手は冒頭の語りの部分で、“We will say, then, that I am mad” (638) と自分が正気を失ってしまっているかもしれないことを認めている。この言葉を考慮すれば、語り手は Eleonora が死ぬまでの部分を “faithfully” (642) に語っていると述べてはいるものの、物理的な事実と心理的な事実の区別がはたしてどこまでなされているかという疑問が、読む者の頭をよぎる。しかし、ここで強調したいのは語られる事実の信頼度に疑問があるということではなく、あくまでこの物語における空間が語り手の心理と密接に関係しているという点である。

以上のように “Eleonora” の谷における空間は「数学的空間」の要素よりも「体験されている空間」の要素がはるかに強いことがわかる。舞台となっている谷の位置は具体的な地名は示されず、外部から閉ざされているという特徴が語り手にとって特別な意味を持っているのは先に見てきたとおりであるが、語り手がほのめかす狂気もまた、物語の信頼を揺るがす作品上の欠点というより、むしろ本作品における複雑な空間を構成する重要な一要素であると考えられるべきであろう。

2 空虚なる都市

以上のように “the Valley of Many-Colored Grass” における空間描写は語り手の心的状態と密接に結びつき、「体験されている空間」としてキリスト教の神話さえ巻き込んだ空間へと文飾されている。では、作品における別の空間、すなわち物語の結末部分、“a strange city” における描写はどうだろうか。物理的な空間の点から考えれば、こちらのほうも谷と同様、具体的な名前は言及されていない。しかし谷の描写と比べると、都市における宮廷生活のそれは驚くほど少なく、分量の面からいえば都市の部分の記述はわずか1ページにも満たない。とはいえ、本作品における都市の重要性は決して低くない。たとえば “The pomps and pageantries of a stately court, and the mad clangor of arms, and the radiant loveliness of woman, bewildered and intoxicated my brain.” (644) という表現からは、谷が持つ楽園のイメージとは対照的な「騒音」や「虚飾」といった負の要素が読み取れ、この都市は谷と対立して描かれていることがわかる。実際、この物語をプラトンのモデルに基づいた人生における愛のアレゴリーとして読む Richard P. Benton は、谷のことを “his [the narrator’s] ‘savage state’ where love is free” と呼び、都市は “the civilized world” であるとしている (Benton 295)。また、伊藤詔子は Poe の風景庭園譚が「失われてしまった楽園を回復する方途の模索」であるとして (伊藤 44-45)、この “Eleonora” を含む風景庭園譚において「ポーの主眼は、自然の本質に内包される死を克服することあり、artistic な自然、『アルンハイムの庭』のエリソンの言葉で言えば『第二の自然』“secondary nature” 創造にあった」と述べている (伊藤 44)。楽園回復の主題が本作品に込められているとするならば、失楽園後の「墮落した文明社会」としての都市のイメージは、原罪の重さを暗示するという点で重要な要素になる。

しかし、都市にあるはずの建物や人間は描かれることはない。確かに “woman” (644) という単語が出てくるが、それも無冠詞の単数形で言及さ

れることにより、肉体を持った人間というよりは“loveliness”（644）という属性を帯びた一つの抽象的な概念として提示されているに過ぎない。また“the king I served”（644）とあるように王の存在も言及されているが、具体的な行動や発言をするわけではなく、ただ「宮廷」という場所を指し示す記号にすぎない。実体なき記号のような人々が住むこの都市は、意味を付与されることのない等質な「数学的空間」のまま「墮落した文明社会」という「体験された空間」に分節されることがない。

3 削除される女

上で述べたように、本作品における都市は実体を欠いたものであるが、空虚なのは何も都市ばかりではない。このことは作品の改稿過程を見てみればわかる。Poe は多くの作品を発表後に改稿しているが、本作品も例外ではない。“Eleonora”の初出は1841年の*The Gift*という雑誌であるが、その雑誌の書評をPoe自身がおこなった際、自ら結末に関して不満を述べている（Mabbott 635）。そして1845年に改稿したものを*Broadway Journal*に再掲載した。改稿の内容について一番目に付くのはErmengardeとEleonoraの描写のかなりの部分が削除されていることである。

以下のErmengardeに関する削除された部分はEleonoraとの類似性を強調している。

Oh, glorious was the wavy flow of her auburn tresses! and I clasped them in a transport of joy to my bosom. And I found rapture in the fantastic grace of her step – and there was wild delirium in the love I bore her when I started to see upon her countenance the radical transition from tears to smiles that I had wondered at in the long-lost Eleonora. (644)

“auburn tresses”や“the fantastic grace of her step”という部分が、後

に引く削除された **Eleonora** の描写と対応している。この部分の削除により、改稿後では **Ermengarde** に関する身体的な描写はなくなってしまう。だが、そもそもこの部分で言及されている「髪」や「足取り」が本当に **Ermengarde** のものであるとは言い難いところもある。語り手が現実目にしているのは彼女の身体ではあっても、それはあくまで **Eleonora** と二重写しになっている身体であり、**Ermengarde** を見ているわけではない。その意味で、改稿により身体的描写が削除される前から **Ermengarde** という女性は描かれていなかった。

次に削除された **Eleonora** の描写の一部を引用する。

In stature she was tall, and slender even to fragility; the exceeding delicacy of her frame, as well as of the hues of her cheek, speaking painfully of the feeble tenure by which she held existence. The lilies of the valley were not more fair. With the nose, lips, and chin of the Greek Venus, she had the majestic forehead, the naturally-waving auburn hair, and the large luminous eyes of her kindred. [. . .] Her fantastic step left no impress upon the asphodel [. . .]. (641)

この箇所も **Ermengarde** の場合と同様、**Eleonora** の身体に関する記述である。彼女は「不凋花になんの跡も残さない」（“no impress upon the asphodel”）今にも消えそうな肉体の持ち主である。肌の色は、描写されていなくても “the Greek Venus” という言葉から、血の流れていないような大理石の白であることが推測できる。彼女の身体は地上の世界にありつつも、生命力と存在感を欠いている。それでも、この描写はまだ **Eleonora** が生きて身体を持った人間であることを示しているが、1845年の版ではこの箇所は完全に削除され、彼女の身体について集中的に語られた箇所は消去されてしまう。「不凋花にいかなる痕跡も残さなかった」彼女の身体は、作品に痕跡を残すこともなく消されてしまうのだ。

あるいはヒロインである彼女でさえ改稿前から存在感を欠いている。巽孝

之は作品中の“**Eleonora**”への言及が“*her*”(644)という代名詞で終わっていることに注目し、「エレオノーラはっさいの固有名詞性を剥奪された代名詞的存在へと変容を遂げている」と述べている(巽 140)。また **Eleonora** という名前についても、**Poe** が **Helen** や **Lenore** といった名前の響きに魅かれたことに由来することを説明し、彼が恋したのは「理想の美女自身よりも、美女を連想させる言語効果それ自体」であり、「美女の存在論的実体よりも美女の物理的記号」であったと巽は指摘している(巽 141)。物語の中心人物であるように見える女性も、先ほどみた都市と同様、実体を欠いた空虚な存在でしかないというのだ。

これらの女性の希薄さは何を意味するのだろうか。手がかりは作品に登場しながらほとんど注目されることのない女性にある。それは **Eleonora** の母親である。この母親は谷で語り手達と一緒に住んでいることになっているが、一度言及されるだけで後は物語中一度も登場しない。最初の 1841 年版では **Eleonora** の死後、語り手と一緒に住んでいるという記述があった(“with the aged mother of **Eleonora**” [643])にも関わらず、1845 年版ではこの部分は削除されている。だが語り手達と一緒に住んでいるという設定までは変えられていない。彼女はなぜ作品中に書き込まれているのだろうか。手掛かりは、母親のことが言及される少し前に、語り手が谷のことを“our happy home”(639)と呼んでいることにあるように思われる。**Eleonora** という名前があくまで理想の美女を指すだけの記号にすぎないとするならば、この“mother”という記号が指示しているのは“home”ではないだろうか。語り手の母親は物語以前に死んでおり(“my mother long departed” [639])、父親については言及されていない。**Poe** 自身の自伝的要素を読み取る批評家もいるが(Mabbott 636)、むしろ **Eleonora** の母親は、語り手の実母の死という不在を補い、谷を“our happy home”へと作り変える機能としてのみ必要とされているのではないか。そして彼女にはそれ以上の働きは与えられず、一つの記号として“home”を指した後は、物語の背景へと消えて行ってしまう。

Eleonora のほとんど削除された身体も、谷の美しさを描写した場面にか

ろうじて残されている。谷に生える木々の皮は “smoother than all save the cheeks of Eleonora” であり (640)、川のせせらぎは “sweeter than all save the voice of Eleonora” である (641)。彼女の身体は一人の女性としてではなく、「楽園としての谷」と結びついたときのみ語り手の興味をひきつける。Eleonora という女性は「理想の美女」だけでなく、「楽園」を指し示す記号でもあるのだ。

このようにみれば Poe が美女の実体ではなく記号に魅かれているという異の指摘は、語り手にも当てはまるように思われる。彼が Ermengarde を愛するのは彼女の中に Eleonora を見るからであり、母親に言及するのは “mother” という言葉が “home” を指示するからであり、そして彼が愛する Eleonora の身体は「楽園」と同質である。だが彼女たちが示すものは全て失われている。Ermengarde に出会ったとき Eleonora は既に死に、谷が “our happy home” であったとしても語り手の本当の母親はもういない。楽園はアダムとイブが原罪を犯したときに失われている。語り手が愛しているのは女たちではなく、既に存在しない何かを指し示す記号そのものである。

4 救済と監禁

以上のように、本作品において都市と女性は実体的を欠いた空虚なる存在であることがわかる。これらのことが作品の空間を考える場合に重要であると思われるのは、Bollnow が「〈体験されている空間〉を形成している諸要因」の中でも重要なことは「人間の共同生活の仕方」であると指摘しているからである (Bollnow 241-42)。また Yi-Fu Tuan も、空間を組織化させる基本的な原理を、“the posture and structure of the human body” と “the relations (whether close or distant) between human beings” に規定している² (Tuan 34)。

このことを考慮すれば、都市の描写が実体を欠いていることにはある程度納得がいく。語り手にとって谷がかけがえのない空間でありえたのは、すで

に失われたものを指し示してくれる母親と **Eleonora** との関係があったからである。逆に言えば、都市の空虚さはそこでの生活において語り手が彼女たちに変わる記号的存在の人間と関係を形成できなかった可能性を示している。その意味で語り手は **Eleonora** の喪失とともに、空間を新たに意味づけする能力を失ってしまっているのだ。

この空間を意味づける能力の喪失は作品の結末に別の意味を浮かび上がらせる。作品中には「牢獄」の比喩が登場する箇所がある。語り手が **Eleonora** に対して初めて愛を感じた場面の後、雲が下がってきて山々の頂上にかかるのだが、その様子は “shutting us up, as if forever, within a magic prison-house of grandeur and of glory.” (641) と表現されている。谷が外部から閉ざされていることは指摘した。しかし、ここでは “prison-house” という語が示しているように、中にいる語り手達が閉じ込められるイメージが表れている。周りに対して閉ざされていた “home” が、逆に中にいるものを閉じ込める “prison” になっているのである。

Eleonora との関係で構成される空間に「牢獄」のイメージが伴うのは重要である。語り手はどこかの見知らぬ都市に出て行きはするが、そこは彼にとって深い意味を持たない。そのかわり、そこで出会うのは **Eleonora** の生まれ変わりとおぼしき **Ermengarde** であり、語り手は最後に **Eleonora** の許し声を聞く。その声は “my lattice” (645) を通して聞こえてくる。この “lattice” は「窓の格子」であるだろう。だが、先ほどの **Eleonora** と愛を交わす場面に「牢獄」の比喩が使われていたことを考慮するならば、この場面にも監禁のイメージを読み取ることができるかもしれない。寓話的に読むならば物語の最後には楽園回復が成就したとも読めるであろう。だが、それは解放ではない。むしろ語り手は **Eleonora** という実体的肉体を欠いた女性との関係に、永遠に閉じ込められてしまうのだ。

結 び

本稿では “**Eleonora**” における空間に焦点を当てて考察を進めてきた。

空間とは時間と共に人間の存在の基本的形式であり、小説の中で登場人物達が活動しているときには必ずそこに存在している。だがそれはあくまで背後に存在しているのであって、空間そのものが前景化されることはそう多くない。しかし、少なくともこの “Eleonora” という短編において空間は、決して作品の背景とし見過ごされたままではいけない。確かに本作品は楽園喪失とその回復という主題を含み、寓話的な解釈を許容するであろう。それを否定するつもりはない。しかし、空間という視点から見た場合、作品の最後に描かれた「救済」にはいくらかの疑問が残る。一人の女性に固執し、他の人間と関係を結べなくなり、閉ざされてしまうことは「救済」なのであるか。たしかに妻の齒にとりつかれ、生きたままそれを引き抜いてしまう “Berenice” などに較べれば、“Eleonora” はずっと穏やかに終わりを迎える。そこには “Berenice” に見られるジェンダーの対立など微塵も存在しないように思われる。しかし語り手は新たな女性との関係を封じられてしまっている。語り手の救いとも呪いともつかぬ結末は、Poe が作り出した空間の複雑さの一端をうかがわせているのではなからうか。

Notes

1 本文からの引用は全て Thomas Ollive Mabbott 編の *Edgar Allan Poe: Tales & Sketches. Vol.1: 1831-1842.* からしている。後述するようにこの作品には複数のバージョンがあるが、Mabbott の方針に従い 1845 年のバージョンを基本としている。

2 このような空間論には批判もある。Hsuan L. Hsu は主体性が空間の経験に重要であることを指摘した Tuan の功績を認めつつ、“Without an analysis of the social production of both space and subjectivity, human geography risks reducing space and feeling to anthropocentric terms.” (Hsu 9) と述べている。

Works Cited

- Benton, Richard P. “Platonic Allegory in Poe’s ‘Eleonora.’” *Nineteenth-Century Fiction* 22.3 (1967) : 293-97.
- Bollnow, Otto Friedrich. *Mensch und Raum*. Stuttgart: W. Kohlhammer, 1963. (オットー・フリードリッヒ・ボルノウ. 『人間と空間』. 大塚恵一, 池川健司, 中村浩平訳. 東京: せりか書房, 1978.)
- Carringer, Robert L. “Circumscription of Space and the Form of Poe’s *Arthur*

- Gordon Pym." *PMLA* 89 (1974) : 506–16.
- Hsu, Hsuan L. *Geography and the Production of Space in Nineteenth-Century American Literature*. Cambridge: Cambridge UP, 2010.
- Ito, Syoko (伊藤詔子). 『アルンハイムへの道 エドガー・アラン・ポーの文学』, 東京: 桐原書店, 1986.
- Kennedy, J. Gerald. "Poe, 'Ligeia,' and the Problem of Dying Women." *New Essays on Poe's Major Tales*. Ed. Kenneth Silverman. Cambridge: Cambridge UP, 1993. 113–29.
- Mabbott, Thomas Ollive, ed. *Edgar Allan Poe: Tales & Sketches*. 1978. Vol.1: 1831–1842. Urbana and Chicago: U of Illinois P, 2000.
- . Eleonora. Ed. Mabbott. *Edgar Allan Poe: Tales & Sketches*. 635–38.
- Magistrale, Tony. *Student Companion to Edgar Allan Poe*. Student Companions to Classic Writers. Westport, Connecticut: Greenwood P, 2001.
- Poe, Edgar Allan. "Eleonora." 1841. Ed. Mabbott. *Edgar Allan Poe: Tales & Sketches*. 638–45.
- Tatsumi, Takayuki (巽孝之). 『E. A. ポウを読む』 東京: 岩波書店, 1995.
- Tuan, Yi-Fu. *Space and Place: The Perspective of Experience*. Minneapolis and London: U of Minnesota P, 1977.
- Wilbur, Richard. "The House of Poe." 1966. Rpt. in. *The Selected Writings of Edgar Allan Poe*. Ed. G. R. Thompson. New York: W. W. Norton & Company, Inc. 2004. 807–23.